

## 寿岳文章からはじまる杉原紙の里

多可町立那珂ふれあい館館長 安平 勝利

私は、兵庫県多可町で文化財のいろいろな調査を担当していますが、特別和紙に詳しいわけではありません。ただ昨今、ユネスコで和紙が世界遺産に登録された事もあり、あらためて町内でも和紙を見直そうという動きが出てきました。

私どもの町は、杉原紙を発祥した町で、もう一度杉原紙を見直そうと現在再調査を行っています。そのもともとのきっかけとなったのは、今日お話しする寿岳先生です。寿岳先生がはじまりで、多可町の杉原紙がはじまっています。そのことを少しお話しさせていただきます。

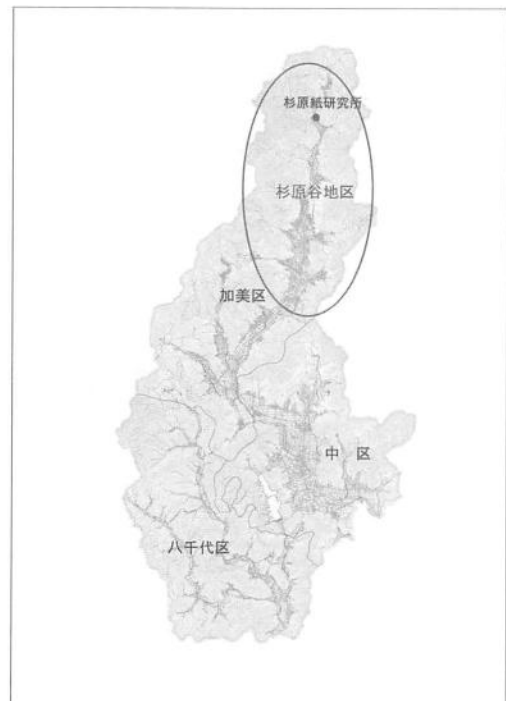


多可町位置図

### 1. 兵庫県多可郡多可町

兵庫県多可町は、兵庫県の真ん中に位置し、とりたてては何もありませんが、まわりは自然がいっぱいで、町の80%は山です。播磨の北側、但馬・丹波と境を接している播磨最北端に位置しています。人口は21,461人、7,531世帯(平成29・7・1現在)の田舎の町ですが、それぞれの町から高い文化を生みだしていることが、合併して初めてわかりました。旧中町は日本酒の「山田錦」の発祥の地、旧八千代町の野間谷村は今日の「敬老の日」が最初にはじまった地で、旧加美町は杉原紙の発祥地。こうしてみると日本の食文化、精神文化、和紙文化という日本の伝統文化に大きな影響を与えた異なる三文化の発祥の地で、この三つの町が合併して2005(平成17)年に多可町となりました。

杉原紙の発祥の地は、加美区の杉原谷地区で、



杉原谷地区位置図

平安時代には藤原摂関家の荘園である梶原庄であることがわかっています。杉原紙はずっとこの地で漉かれて盛んになっていくのですが、中世期には、杉原谷地区だけでなく、中区・八千代区からもたくさんの紙を貢納しているので、多可町全体でかなりの紙を生産、出荷していたことがわかっています。



杉原紙の里

地図の赤い点のところに、現在でも杉原紙を漉いている杉原紙研究所が設立されています。紙漉きをしている建物と、体験学習や特産品販売を行っている建物がありまして、手前の黒の建物が寿岳先生に寄贈いただいた資料を展示している「寿岳文庫」です。これらが一つにまとまって、杉原紙の里の拠点となっています。

## 2. 杉原紙

杉原紙について簡単にお話します。

杉原紙についての記述は、たくさんの文献に出てきますが、「梶原紙」「杉原紙」更に変化して「すいはら」など、愛称も含めていろいろな呼び名があります。

杉原紙が最初に歴史上の資料に出てくるのは平安時代後半です。関白藤原忠実が日記『殿暦』の中で、永久4(1116)年の条に「梶原庄紙」と記載していて、これが歴史文献の中では一番初めにでてきます。以後、現代まで脈々と杉原紙は続いています。時代によって紙質は変わっていきますし、またある時期には途絶えたこともあります。かろうじて紙漉きをやっていた人の記憶をもとに復活させて、現在まで約900年間も長く続いています。いわば「超お化けロングヒット商品」で、これだけ長く需要が求められてしている商品はないのではないかと思っています。

中世から近世の文献の中をみていくと、杉原というのはたくさん出てきており、日本の産地名のついた紙の中では一番多く出てきます。使われている層も、貴族からはじまり、武家・寺院など、公験文書(公文書)、書状文書、印刷料紙として、また贈答品、土産物として幅広い層にたくさん使われています。贈答用の一束一本という、紙を贈る時のスタイルがあるのですが、このスタイルも杉原紙からはじまったといわれています。

江戸時代になると、井原西鶴、近松門左衛門の文芸作品の中にも「すいはら」が使われています。当時の人はそれを読むと、「すいはら」と出てくるとこんな紙だなと分かるく



一束一本

らいに普及していたようです。ちなみに、「ホッチキス」はもともとステープラーが商品名ですが、ホッチキス社が創った商品のステープラーの人気が出て広がったため、ホッチキスと呼ばれるようになったのですが、同じように、「すいはら」「すぎはら」も、固有名詞から普通名詞に変わっていくようになって、和紙の代名詞のような使われ方がされます。そうすると、他の地域でも杉原紙をまねして製作するようになるので、室町後半になると、発祥の地、杉原谷だけでなく、各地で〇〇（産地名）杉原紙がつくられるようになりました。

このように、杉原紙は広く普及していきますが、あまりに広がりすぎて、どんな紙かなかなか定義しにくい紙、実態がつかみにくい紙にもなってしまいます。大正期になると「まぼろしの紙」と言われ、どこでつくられはじめたかすらわからなくなったようです。

明治期になりますと、洋紙の流入、産業構造の変化によって、手漉き和紙が衰退して紙漉きをする人がいなくなってしまいました。その後、昭和45年に杉原紙は復活を遂げますが、途絶えてから復元するまでに寿岳先生に深く関わっていただきました。その後の流れをみますと、資料にありますように、昭和47年、杉原紙研究所設立、昭和58年、兵庫県重要無形文化財に指定、平成5年、兵庫県伝統的工芸品となり、現在でも杉原紙は杉原紙研究所で漉かれているというのが杉原紙の大まかな流れです。

### 3. 杉原紙研究史

本題の杉原紙の里、杉原紙のはじまりについての研究史になります。

まず大正期以前の時代には、杉原紙のはじまりは鎌倉時代だと考えられていました。その理由は高野山の文書（『高野版印板目録』正安2（1300）年の中に「印刷に使う料紙は梶原紙」という記載があります。

もう一つは、鎌倉時代の『鎌倉年代記』の中に、「承久元年（1219）から杉原紙が流布し始めた」とあります。この二つの文献をもとにして、大正期以前には、杉原紙は鎌倉時代からつくられはじめたと考えられていました。

では、どこでつくられはじめたと考えられていたか。当時の段階では、はっきりした資料はまだ発見されていませんが、もともと南北朝、室町、江戸時代に書かれた地誌、辞書類の中に「播磨梶原で作られた紙」、あるいは「播州杉原村より始まった紙」という記録があり、播磨の国の「多可郡杉原谷より生まれた」ということが書いてあります。ただそれらが編纂されたのは南北朝期以降のことで、鎌倉時代に実際につくられていたという直接的な記述はありませんでしたので、決定的な資料にはなりません。したがって、当時はもう一つの説がありました。美濃国揖斐郡に東杉原というところがあり、ここが発祥地という説です。根拠として美濃はもともと古代より優秀な紙の生産地で、播磨は二番目くらいです。この美濃紙の主生産地、垂井に近いところに杉原というところがあります。美濃は古代より製紙が盛んで、官営製紙所もあったので、杉原紙はそこでつくられたのではないかという説でした。

次に大正を過ぎて昭和に入りまして、紙の研究が本格的になります。寿岳先生もそうです

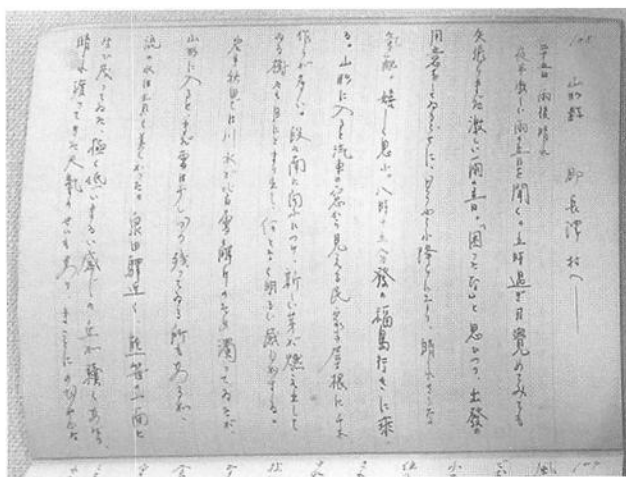
し、新村先生、堀部先生などが日本の和紙研究の先駆者になり、この先生方が活躍されるのが昭和の初期以降です。

昭和 11 (1936) 年、小野晃嗣 (1904-1942) 先生という歴史学者が「中世に於ける製糸業と紙商業 (上)」という論文を『歴史地理』67 巻 4 号に投稿されました。これは紙だけでなく、いろいろな中世の流通について述べられている論文ですが、その中で中世期に播磨が杉原紙の主産地であろうと唱えられています。播磨の中でも多可郡杉原谷が、杉原紙の原産地ではないかと提唱されています。直接的な根拠資料は、まだこの時代には発見されていませんでしたので、先述のように鎌倉時代くらいに始まり、美濃の杉原か播磨の杉原かもわからないという時代にこの論を唱えられます。

翌年、昭和 12-14 年 (1937-1939)、寿岳先生と奥様、静子 (しづ) さんが、全国の紙漉産地をまわられます。その成果が『紙漉村旅日記』(昭和 18 年) にまとめられています。その時に、百カ所以上の産地をまわられ、集められたサンプル資料が、先ほど紹介した寿岳文庫の中に大切に保管されています。先生方は、紙漉場をまわられるとその日に取材したことを、その日のうちに整理されています。その時の日記やメモも残っています。この記録をまとめたものが『紙漉村旅日記』です。

その後、昭和 15 年 (1940) 8 月 2 日から 3 日にかけて、寿岳先生と新村先生が杉原谷村へ来られます。その様子が『和紙研究』第 7 号に掲載されています。新村先生はこの時「杉原紙源流考 (上)」をこの和紙研究に載せられます。そこで、この段階では、まだ高野山の文書や『鎌倉年代記』の資料しかありませんが、この辺の拠出資料を研究され、その中で杉原紙がどこでつくられたかを検証され、播州杉原谷で作られた可能性が強いということを論文に書かれました。

一方寿岳先生は同じ『和紙研究』の中で、「杉原谷紀行」という紀行文を掲載されます。この中では、多分、この地に来られて、ここで杉原紙がつくられたと体感されたのですね。



調査メモと『紙漉村旅日記』向日庵本 (昭和 18 年)

一番大きいのは研究者の勘でしょう。「杉原谷紀行」を改めて読んでいただくと、当時の情景が目に浮かぶような表現で、非常に面白いものです。

どんなことが書いてあるかといいますと・・・・・・・・。

まず京都駅で、新村先生と待ち合わせます。「珍しくも洋服の新村先生が、もうプラットフォームに入って、颯爽と、しかもにこやかに歩き廻っておられる」という書き出しではじまり、「汗に苦しめられる夏の旅行を最も不得意とする私の方が、これでは先生のお世話になるかも知れぬ」と続きます。8月2日、7時22分に京都駅を出発されて、播但鉄道で多可郡の鍛冶屋駅に11時30分に来られますが、ガソリンカーに乗って約4時間の旅でした（現在は1時間30分に短縮されました）。駅からハイヤーに乗って杉原谷へ来られ、当時の村長と小学校の校長、郷土史家の藤田貞夫さんの三人に会われます。

ここで、地元でかつて紙漉きをしていた職人の人達に聞き取り調査をされます。このお二人の先生方の来村が、地元に大きな影響を与えます。例えば郷土史家、藤田貞雄さんは、この時、新村、寿岳両氏に会ったことをきっかけに、紙漉きの研究、和紙の研究へと進まれ、杉原紙を深く研究されることとなります。聞き取りをされた紙漉経験者、宇高弥之助さんですが、後に杉原紙を復活させる時、この方の記憶をもとに杉原紙が復活していきます。従って8月2日というのは、多可町にとっても非常に記念すべき日ということになります。

その日は村長の家に泊まれ、翌日は近隣の寺社等をまわり、最後は8時半を過ぎた頃に向日庵に着いたところで、杉原紙紀行は終わっています。

当時先生方が見られたであろう杉原谷の風景を紹介します。

杉原谷は、両側に山が迫って、真ん中に杉原川が流れ、その両側に田んぼがある、山あいの中の小さな谷平野です。主な産業は農業です。先生方が泊まれたのは、もともと大庄屋であった村長の家。この家は今でもきれいに保管されています。翌日行かれたお寺（禅宗）でも、寺に残っていた杉原紙を集められています。さらに地区の神社に行かれて、そこに保管されている室町時代の棟札をみられます。棟札には「梶原本庄」という墨書があります。これが後々、撰関家の荘園、「梶原庄」である一つの根拠になるのですが、このように杉原谷地内を見学されています。

こうしたことを経て、同年に寿岳先生は「杉原谷紀行」、新村先生は「杉原紙源流考」上編を、さらに翌16年に、寿岳先生は『和紙風土記』を出版され、杉原紙は播州多可郡杉原



杉原谷の風景

谷が発祥だろうという説を発表されます。ただし、まだ決定的な資料はこの段階では、出てきていませんでした。

それが出てくるのは、昭和18年(1943)、雑誌『清閑』(第16冊)において、堀部正二さんという近衛家の陽明文庫の囑託をされていた方が、『杉原紙割記』という論文を発表されます。これに新しい発見資料を紹介され、杉原谷が杉原紙の発祥地である動かぬ根拠を示されます。発見された資料というのが、まず『殿暦』という関白藤原忠実の日記の中に「相原庄紙」というのが出てくる。それから『兵範記』の紙背文書の中に杉原紙についての記述がみられる。この二つの資料によって、それまで杉原紙のはじまりは鎌倉時代と言っていたのが、平安時代まで遡るとということがわかった。さらに近衛家の荘園目録とか、近衛家関係の文書をつき合わせて考えると、そこで言う「相原庄」は、播磨多可郡の相原庄であることが断定され、杉原谷が杉原紙の発祥の地であると判明したのです。

『殿暦』(資料①)にはどんなことが書いてある

かという、永久4年(1116)の条に、藤原忠実が息子、娘に、藤原家に代々伝わる家宝と一緒に相原庄紙百帖を添えて贈った記されています。なにかの法要があってその時に、娘の姫君には、先祖伝来の牡丹唐草を施した螺鈿の絢爛な調度品とともに、相原庄紙百帖を与えた。また長男の忠通、この人も後に関白になるのですが、この人にも同じように装飾を施した調度品と一緒に相原庄紙百帖を与えたと記載されています。ですから、少なくとも平安時代の終わり頃には相原庄紙、すなわち後の杉原紙と言われる紙があったということがわかります。

それからもう一つ、『兵範記』(資料②)で、平信範という人の日記です。昔は、紙は貴重なので、手紙や書状などの裏面は再利用することが多いのですが、その再利用された手紙の文面に杉原紙についての記載がありました。仁安2年(1167)冬之巻の紙背文書として、「今年の杉原紙の出来はあまり良くなかった。だから半分ほどは返した。ただその中のましなものを選んでお経の料紙に使います」とあります。このように、平安時代の後半期の杉原紙についての記述が新しく発見されました。

さらに近衛家の荘園目録を見ますと、播磨国相原庄は京極殿の領地とあります。京極殿とは、『殿暦』を書いた藤原忠実の祖父・藤原師実に当たる人ですので、少なくとも平安時代



清水西宮神社棟札(応永17年)

の中頃には播磨国梶原庄というのは、藤原摂関家代々世襲の荘園であったということがわかります。これは多可郡杉原谷のことを指しています。また、近衛家のいわゆる家計簿みたいなものですが、『後法興院雑事要録』という書物の中には、梶原本庄や新庄から杉原紙をたくさん近衛家に貢納している記事があります。この辺の資料を勘案して、播磨国杉原谷から杉原紙が生まれたという説を堀部さんは唱えられました。

これはその人物関係図（資料③）です。忠実のお祖父さんの頃から、播磨の梶原庄が、藤原摂関家の荘園であったと書いてある。更には、摂関家三、四代に仕えた家司の日記の中に杉原紙のことが出てくるのです。すなわちこの時代の摂関家周辺の人々の資料の中に、播磨国梶原庄でつくられた梶原庄紙の記事が記載されていることがありまして、杉原紙の発祥は播州杉原谷であるということ、少なくとも平安時代の終わり頃には杉原谷でつくられていた紙であるということが確かめられました。

先ほど申しましたように、堀部氏は『杉原紙割記』を発表されるのですが、没年をみると雑誌『清閑』に発表された翌年に亡くられています。そのことを御存知だった新村出先生が、改めて『和紙研究』第12号（昭和20年1月）に、堀部氏の『杉原紙割記』の論文を再掲載されます。

こうした研究成果を契機に、戦後の復興していく時代、地元杉原谷でも『杉原紙発祥の地である』という意識が高まり、昭和41年（1966）に『杉原紙発祥之碑』が建立されます。現在、杉原紙研究所の横にその碑があります。この碑は、題字が新村先生、撰文は寿岳先生によるものです。原文ではありませんが、要約を資料につけさせてもらっています（資料④）。そこにはこの杉原谷が杉原紙の発祥の地であるということが簡潔に述べられています。



『杉原紙発祥之碑』

昭和42年（1967）には、寿岳文章先生が、日本の和紙研究のバイブル的存在である『日本の紙』を出版され、この中でも杉原紙について述べられています。昭和45（1970）年、新村先生と寿岳先生から刺激を受けられ杉原紙を研究された藤田貞雄氏は、『播磨の紙の歴史 杉原紙』という本を出されて、今回お話した新村、寿岳、堀部各先生の説をまとめられ、杉原紙の歴史というものを体系化され、簡潔にまとめられておられます。郷土史研究家と言いつつかなり専門的に調査研究された本になっています。杉原紙が播磨の杉原谷で生まれた紙であるという説が確立していきます。地元の住民（加美町）の中にも、杉原紙を発祥したという誇りと、それを途絶えさせてはいけない、継承して保存していこうという意識が高まっていきます。当時の町長の言葉を借りると「小さな町の大きな

文化事業」を行う。そこには住民と行政が一体となって杉原紙を守っていこうという強い意識の広まりがみられます。こうした中で、昭和45年（1970）に杉原紙の技術が復活します。その復活の契機となったのは、やはり寿岳先生や新村先生が杉原谷へ来られて、地元の人と顔を合わせて調査をされたことがはじまりとなって、杉原紙の復元へと繋がっていきます。昭和47年（1972）には杉原紙研究所設立、昭和58年（1983）には県重要無形文化財に指定、平成5年（1993）には兵庫県伝統的工芸品に選ばれていきます。

復活後、地域の住民の杉原紙に対する思いや誇りから、楮の一軒一株運動、「一軒に一本楮を植えよう」という運動がはじまり、小学校の卒業証書は研究所に行って自分で漉いた和紙でつくる活動が行われていきます。

平成8年（1996）には寿岳先生の長女の寿岳章子氏に、杉原紙研究所の名誉館長を務めていただくことになり、それがきっかけで、寿岳先生のたくさんの和紙関係の資料を寄贈いただきました。これらの資料は『寿岳文庫』として、平成12年（2000）に設立された『和紙博物館』において大切に保管されています。

ですから、杉原紙のお話をする際には、多可町は寿岳先生とは切っても切れない間柄になっています。現在では、杉原紙は、中学校の社会の教科書にも載っていますし、模擬試験にも登場したりしています。

近年、和紙技術がユネスコの世界文化遺産に認定されまして和紙が注目されていますが、多可町でも、あらためて地元発祥の杉原紙への思いが強くなっています。2020年には杉原紙復活50周年を迎えます。

昨年度から、寿岳先生や新村先生、藤田氏の研究以来、あまり進まず止まっていた杉原紙の研究に新しい手法を取り入れて、もう一度、技術や歴史を再検討しようと、杉原紙総合調査委員会というのを立ち上げて調査を行っています。その中では新たな成果も少しずつ出始めています。それらは杉原紙が日本の紙文化に非常に大きな影響を与えてきたことを示しています。平安時代からずっと続いている紙の名は『杉原紙』しかない。この杉原紙に着目された新村・寿岳両先生の研究があって、現在の杉原紙があります。

寿岳先生から始まった杉原紙、手漉き和紙への思いというものを、さらに継承発展させ、杉原紙の里としてさらなる飛躍をめざしていこうという動きは、現在も繋がっているということをお話させていただきます。どうもありがとうございました。

[文字起こし：長尾史子]



杉原谷村来村時の新村出氏（右端）、  
寿岳文章氏（左から2人目）



資料①

『殿曆』永久四年（1116）七月十一日の条より

『十一日壬寅天晴 早旦参院 依召参御前 数刻候  
退出 供養仏 正了智、導師永緑法印  
今日姫君・内府各奉倉納、各調度一具 鞍一具

姫君倉納

調度一具

沃懸地 牡丹唐草 加仮螺鈿

件調度 宇治殿令奉四条宮 從宮給云々（予？）也

鞍一具 銀地草手 予新調也

梶原庄紙 百帖

内府倉納

調度一具

沃懸地 螢繪 螺鈿

件調度 京極北政所御調度也 大殿初令渡北政所

給時被立之 北政所給予也 吉事時必立之

鞍一具 水清地 件鞍家相伝宝物也

梶原庄紙 百帖

資料②

『兵範記』仁安二年（1167）冬之巻の紙背文書

『跪以承候了 梶原紙今季

之由 沙汰人等令申候

■半分過返遣候了 見納内

金泥一切経料紙令下行候也

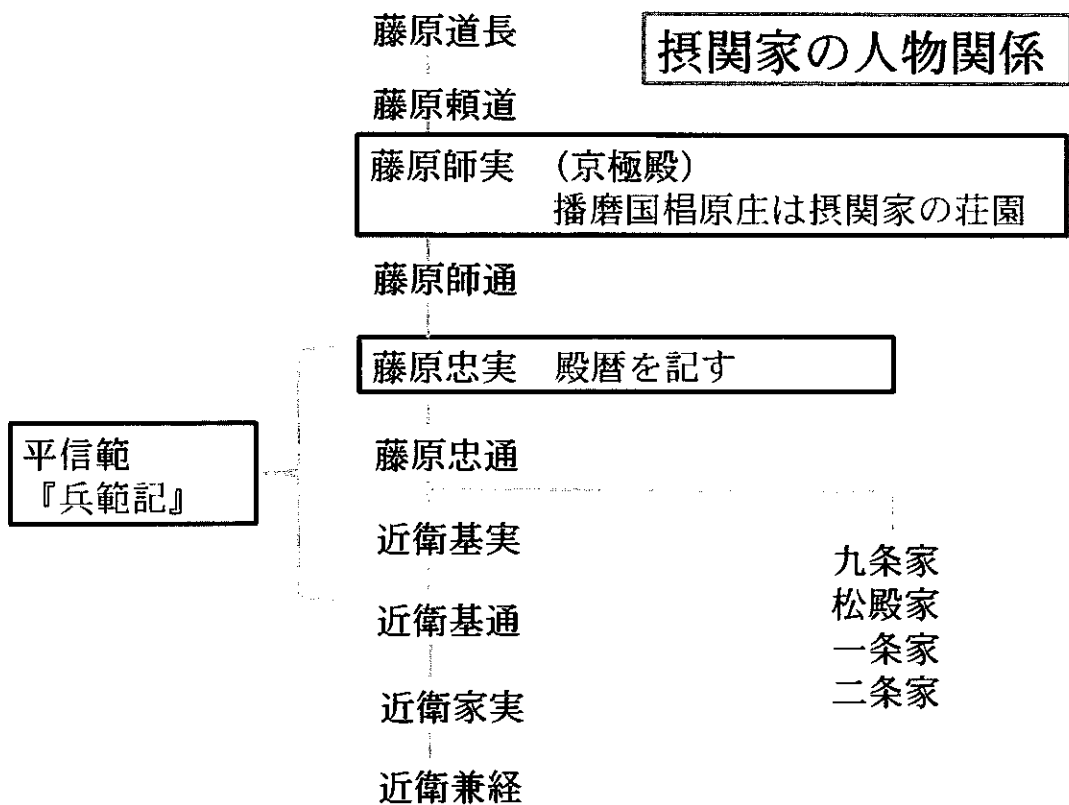
雖然此程候覽 可令召進候

唯今小預男等召集候也 雖

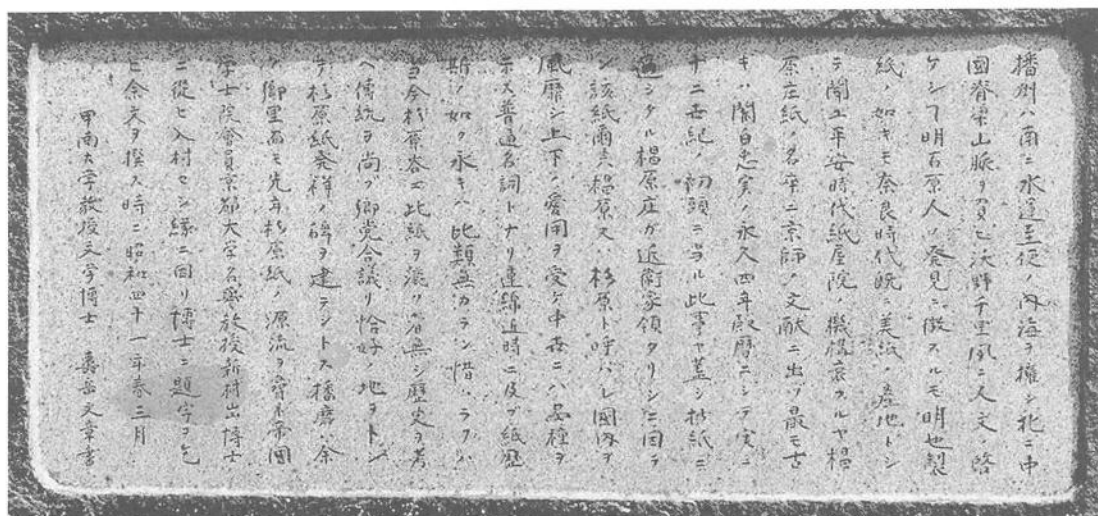
自今以後 御返事争致疎略

候哉 能盛怖々謹言

十一月廿五日 安芸守能盛



資料④



『杉原紙発祥之碑』撰文

『杉原紙発祥之碑』意訳

播州は南にたいへん水運のいい内海を持ち、北に日本の背骨中国山脈を負い、肥沃な平野が広がり、早くから人文が開けたことは、明石原人が発見されたことに象徴されているように明らかである。製紙についても、奈良時代すでに美紙の産地として聞こえ、平安時代紙屋院(官用の製紙所)の機構が衰えるや、相原庄紙の名がにわかになりに出るようになる。最も古いのは、関白忠実の日記「殿暦」の永久四年の記事で、実に十二世紀の初頭のことである。この事はおそらく紙を漉くのに適した相原庄が、近衛家の領地だったことによるのであろう。

それからこの紙は「相原」または「杉原」と呼ばれ国内を風びし、人々の愛用を受け、中世には紙の品種を示す普通名詞となって連綿と近年にまで続いている。紙の歴史がこのように永いのは他に類のないことであろう。

惜しむらくは現在、杉原谷にこの紙を漉く者がいない。そこで歴史を考え、伝統を尊ぶ郷の人々が相談し、恰好の地を選んで杉原紙発祥の碑を建てようとするものである。

播州は私の郷里でもあり、しかも先年杉原紙の源流を尋ね、帝国学士院会員京都大学名誉教授新村出博士に従って入村した縁によって、博士に題字を乞い、私が撰文した。

時に昭和四十一年春三月

甲南大学教授・文学博士 寿岳文章